

聖書：ローマ 8：28～30

説教題：ご計画に従って

日時：2015年12月6日（朝拝）

前回は28節の半分までを見ました。このローマ書8章28節は全聖書の中で最も有名で、かつ最も慰め深いみことばの一つです。しばしばこの御言葉は良い結果を得た人が、それまでの導きを振り返って、神は確かにすべてのことを働かせて益としてくださったとあかしする時に用いられますが、本来はこれは苦しみのただ中にある人が告白するための言葉です。特に深い慰めを与えてくれるのは「すべてのことを働かせて」という部分でしょう。この「すべて」には文字通り「すべて」が含まれます。今、経験している様々な苦しみも、偶然降りかかったように見える災難も、人からの不当な仕打ちや中傷も、さらには私の失敗や私が犯した罪も、・・・これらの出来事の中で私たちは、「取り返しがつかないことになった」「もう自分の人生は終わりだ」などと思いがちです。しかし決してそうではない。神はすべてを用いるのです。無駄なこと、意味のないことは一つもないのです。全部漏らさず用いて神は私の将来が栄光につながるようにしてくださる。このことを信仰によって告白できたら、俄然勇気がわいて来るでしょう。悩みがあっても喜ぶことができます。いや悩みをはるかに上回る喜びに支えられて目の前の苦しみを乗り越えるように導かれるでしょう。

しかしこの御言葉は無制限にすべての人に当てはまるものではありません。これが当てはまる人たちが2つの表現で言い表されています。一つ目は「神を愛する人々」。これはイコール、クリスチャンのことです。聖書に最も大事な第一の戒めとして、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」という御言葉がありますが、そのように生きている人のことです。果たして私たちは「神を愛する人々」でしょうか。敏感な心を持つ人ほど、自分の足りない面を見つめて恐れを覚えるでしょう。しかし愛はまず神から始まります。神がまず私たちを愛して下さいました。その神を知って、私たちは神を愛する者へと導かれました。その心を深く頂いています。私たちはこのことを感謝して、この言葉を自分に当てはめて良いのです。そしてその性質を頂いた者として、益々そのように生きることへと向かって行けば良いのです。パウロはここで決してクリスチャンの中の、特に神を愛している人のことを考えていたわけではありません。これはクリスチャンを一言で言い表す言葉なのです。

もう一つ「神のご計画に従って召された人々」と言われています。先の「神を愛する人々」という言葉も十分にクリスチャンを表現していますが、28 節の祝福が私たちの愛に基づいていると取られることがないためでしょう、パウロはより確かな基盤にクリスチャンを立たせています。すなわちクリスチャンとは「神のご計画に従って召された人々」である。確かに私が信じ、私が自分で意志して、今の信仰生活を送っているのですが、より大きな視点から捉え直すと言えらるでしょうか。それは私は神のご計画に従って召されて今の信仰生活を送っているということです。この信仰は私の気まぐれで移ろいやすい決心から始まったのではなく、それに先立つ神の大きな計画の中で導かれ、支えられているものであるということです。

そのご計画と関わる神のみわざとして、29～30 節に 5 つのことが出てきます。それは 29 節の「あらかじめ知る」「あらかじめ定める」、30 節の「召す」「義と認める」「栄光を与える」です。これはこのあと見ますように、一方では永遠の昔にまで遡るものであり、一方では永遠の将来にまで関わることです。私たちは決して何の意味もなく、たまたまここにいて、これからどうなっていくか分からない存在なのではない。永遠の昔になされた神のみわざに基づいて今日の私の歩みがあり、また今の私の歩みは神が定めている最終ゴールと結びつく形で導かれているのです。このことを理解する時、私たちは目の前の苦しみや患難を一時的な人間の思いで判断してしまわないようにと導かれます。むしろ神のご計画に基づいて、鳥瞰図を見るようにして、パノラマを見るようにして、自分の人生を眺め、その中で今日の自分の人生や苦しみを位置付け、その意義を悟って歩むように導かれるのです。

ではまず 29 節に記されている神のみわざから見て行きます。ここに 2 つのことが記されています。これらは永遠の昔になされた神のみわざと言えます。その一つ目は「あらかじめ知った」というものです。この「知る」という言葉を単なる知識という意味にとると、意味が通じなくなります。なぜなら神は全知全能の神であり、この世界に神の知らないものなど一つもないからです。ですからこの「知る」とは、もっと特別な意味なのだろうと考えられます。聖書を読んで行くと分かりますように、聖書における「知る」という言葉は「人格的に知る」というニュアンスを持っています。それは「愛する」という言葉とほとんど同義と言っても良いほどです。私たちが誰かを愛するなら、その人のことを知ろうとします。その人は何を考えていて、どんなことに興味や関心があって、何が好物で、何を喜びとするのか、等々。

逆に愛の気持ちを持たない人については、知ろうとはしません。つまり神が私たちをあらかじめ知ってくださったとは、神がはるか昔から私たちを愛してくださったということに他なりません。私たちがまた存在してもいず、何の良い姿も示していない時にです。このような永遠の神秘に立ち入ると、私たちは自分の頭に収まるようには理解できないため、目まいがしそうになりますが、聖書はこのことを私たちに真理として告げています。そしてこれは次の2つ目のことと合わせて考える時に、よりそのメッセージが浮かび上がって来ることになるでしょう。

その2つ目は「御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定めた」ということです。何に定めたかと言うと、御子の形と同じ姿にです。これは神のご計画における私たちの最終ゴールのことです。Iヨハネ3章2節：「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」この御言葉から教えられることは、私たちはやがての日までは栄光に輝く主のありのままの姿を見ることはできないということです。それはそれが許されるほどに聖い者にはまだその日までは達していないからです。私たちは聖められて行き、ついにキリストに似た者へと変えられるに及んで初めて主のお姿をはっきり見ることができるのです。果たしてその主の栄光のお姿とはどんな姿なのでしょう。その片鱗は聖書のいくつかの記事に示されています。一つはイエス様が高い山で栄光の姿に変貌された記事です。ペテロ、ヤコブ、ヨハネの前で、イエス様の御顔は太陽のように輝いたとか、御衣は光のように白くなったとか、世のさらし屋ではとてもできない白さに輝いたとあります。あるいはダマスコ途上でパウロに現れたイエス様のお姿を考えることもできます。主の光は太陽よりも明るく輝く栄光の光だったと語られています。これらはまだ完全には聖められていない者たちが見た光ですから、その彼らでも耐えられるレベルのものだったと思います。しかしやがての日には私たちは主のありのままの栄光の姿を見るのです。そしてその時には私たちも主を鏡で映し出すほどの栄光の状態に導かれていると聖書は語ります。このゴールに至るようと神は私たちをあらかじめ定めてくださったのです。そして一つ目のことと合わせてパウロが言っているのは、神は愛によってこのことを定めてくださったということです。ただ機械的に定めたのではなく、愛のお心によって、この予定するというみわざを行なってくださったのです。

さて、この永遠の昔に立てられた神のご計画が歴史の中でどのように展開されるかが 30 節にあります。ここに 3 つの神のみわざが述べられています。一つ目は神の「召し」です。これは神が私たちを人生のある時点において、ご自身の計画に従い、救いへとグイッと引き寄せることです。私たちは聖書においてイエス・キリストを信じなさいと命じられており、その命令に従って自分の意思で信じますと告白し、救いに入れて頂きました。しかしそのように私たちが信仰告白できたのは、実は隠れた私たちの目には見えない神の引き寄せる働きがあったからです。ヨハネ 6 章 44 節：「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。」そして神からこのわざが始まったのなら、私の救いは必ず最後まで行くということもこれは意味します。神は最後まで見通した入念な考慮を経て、私たちのための救いの働きに着手されました。であるなら、その働きは必ず目的に達する。それがこの神の「召し」という聖書の教えが持っているメッセージです。

次に「召した人々をさらに義と認め」。この「義認」については、この手紙の前半で集中的に見て来ました。本来は自分の罪のために救いようのない私たち。しかし神は私たちをキリストと結び合わせて、私たちの罪を赦してくださいました。そればかりか私たちをキリストにあって義と宣言してくださいました。この義認の恵みを頂くことによって、私たちはさばきを恐れなくて良い者とされます。また大胆に神に近づくことを許され、神と交わって歩む者とされます。神との交わりを妨げていた罪が取り除かれて、あらゆる祝福が私たちに注がれるようになります。

そして最後 5 つ目に「義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」とあります。この「栄光」とは先に見た、御子の姿に似た者になることです。注目に値するのは、「栄光をお与えになりました」と過去形で書かれていることです。これが現実に私たちに生じるのは将来なのに、もう起こった出来事のように過去形で語られています。それほどこのゴールは確実なもの、不動のものとして私たちに備えられているということでしょう。

私たちはこの神のご計画に従って今日の自分の歩みがあるということを感じていられるでしょうか。最後にもう一度、二つのことを述べてまとめにしたいと思います。その一つ目は私たちは永遠の昔から私のために計画を持っている方に愛されて今日ある者たちであるということです。目の前に苦しいことやつらいことがあると、

私たちは他のことが見えなくなりやすいものです。なぜ自分だけがこのように悲惨なのか、なぜ私だけがこのような中に放置されるのか、私は誰にも顧みられていないなどと思いがちです。しかし私は神の愛の対象です。永遠の昔から神の愛のまなざしで見つめられ続けている者です。その方の愛に基づくご計画によって今日の私の状況があるのです。これは見放されている結果ではないのです。放り投げられている状態ではないのです。私を愛しておられる神の愛の計画によって今日の私とこの状況があるのです。

そしてもう一つは、この方によって私は必ず益へと導かれるということです。神が導いてくださる最終ゴールは、御子の栄光の似姿にまで導かれることです。この私がどうしてそんな状態にまで至り得るだろうかと私たちは思います。しかし神はこのことを計画され、必ずそこへ導かれます。そしてそのために苦しみや試練を用いられるのです。確かにこの私たちが栄光の御子に似る姿にまで変えられて行くとするなら、ちょっとやさそとの試練では足りないでしょう。やはり様々な試みを通して訓練され、練り上げられて行くことが必要でしょう。しかし神は決して無理はせず、調整しながら、そのことを導いて下さっています。必ず耐えられるものとしてそれらのものを私たちに与えて下さっています。その中で私たちを聖め、造り変え、いよいよ整えてくださるのです。その栄光に至る祝福の道を私たちは今、歩いているのです。

このことを心に受け止める時、私たちは悲しみの中にあっても、ふつふつと喜びがわき起こって来るのではないのでしょうか。今の苦しみや悩みは決して意味のないものではない。これは全部、私の益につながるためのものです。神がそのように導いておられます。これらは全部、私を栄光の状態へ連れて行ってくださるために神が用いてくださる手段なのです。私たちはこの聖書のメッセージを感謝したいと思います。そして平安と喜びを頂いて、「神がすべてのことを相働かせて益としてくださることを私は知っています」と告白して、この神に信頼し従う歩みをもって、神にすべての栄光を帰す歩みへ導かれたいと思います。